NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

February 2023　vol.36

島根県立石見美術館ニューズレター

島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

企画展「イッタラ展　フィンランドガラスのきらめき」
ガラスに現されたアルヴァ・アアルトの曲線

企画展「没後150年　山本琴谷と津和野藩の絵師たち」
山本琴谷が描いた津和野藩邸内の杉戸絵

報告 企画展「平川紀道・野村康生　既知の宇宙｜未知なる日常」
石見から、地に足をつけて宇宙を思う

36

Photo: Anton Sucksdorff

企画展

「イッタラ展　フィンランドガラスのきらめき」

2023年4月22日(土)～6月19日(月)

休館日：毎週火曜日(5月2日は開館)　開館時間：9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)

A　B　C

A. アルヴァ・アアルト《「アアルト ベース」のためのドローイング》　1936年、フィンランド・デザイン・ミュージアム蔵　© Design Museum Finland

B. アルヴァ・アアルト《アームチェア パイミオ》　1932年、アルヴァ・アアルト財団蔵

C. アルヴァ・アアルト《ウッドレリーフ》　1934年、アルヴァ・アアルト財団蔵

※図B、図Cは「アイノとアルヴァ　二人のアアルト」展図録より引用。展覧会では出陳されません。

ガラスに現されたアルヴァ・アアルトの曲線

今日フィンランドを代表するライフスタイルブランドの一つとなったイッタラ。そのルーツは1881年に同国南部の小さな村に作られたガラス工場にある。日本初の大規模展覧会となる本展では、およそ450点の作品および資料を展覧し、140年に渡るその歴史を振り返る。主たる展示物はガラス製品であるが、古い写真や撮りおろしの映像を交えながら、協業してきたデザイナーや職人たちの仕事を紹介し、13のテーマからそのデザイン哲学に迫る。日本とイッタラとの関わりにも触れ、多様な表現を余さず紹介しようという内容だ。

その中で、繰り返し登場する作品の一つに、《アアルト ベース》(表紙)と呼ばれる花器がある。建築家としても名高いアルヴァ・アアルト(Alvar Aalto, 1898−1976)がデザインしたこの作品は、本展覧会のために特別限定版が制作・販売されるなど、今日も高い人気を誇っている。初めて姿を現したのは1936年のことだ。

フィンランドがロシア帝国から独立した1917年、イッタラはカルフラ・ガラス工場(1889年創業)に合併される。1932年と36年、カルフラ＝イッタラ(合併以降80年代まで混合名称が使われた)はガラスデザインのコンペティションを開催。その36年の機会にアルヴァが提出したラフスケッチのなかに、《アアルト ベース》の原型があった。描かれた非対称の柔らかな波型(図A／「アアルト」はフィンランド語で「波」を意味する)は、今日では母国の湖からインスピレーションを得たもの、などと想像されている。波、あるいは水たまりのようにもみえるいくつかの形は、一つの曲線に決めきることをせずに柔らかなイメージを伝える。

この造形は同じ頃アルヴァが手がけた別の仕事を想起させる。フィンランド南部のトゥルク近郊の深い森の中に佇むパイミオ・サナトリウム(アアルトが設計、家具なども揃えた)のために作られたアームチェア(1932年／図B)の肘掛ともなる閉塞フレームがその好例だ。曲木の技術を用いてひとつなぎにされた合板の帯が、柔らかなカーブを描いている。アルヴァは同じ頃、同様の技術を用いて木製レリーフも多数作っており(図Cなど)、自身の作品を紹介する展覧会などで象徴的な作品として展示していた。曲木が作る曲線の、構造的な強さとは別に、造形的な美しさや面白さに固有の価値を見出していたことが想像される。

《アアルト ベース》に目を戻すと、曲木の閉塞構造を横倒しにしたように見えなくもない。ただやはりカーブの深いところや連続したところなどを見れば、ガラスであればこそ表現可能な曲線を整え、構造としてのみならず装飾としても曲線を用いる、絶妙なデザインがなされているのがわかる。アルヴァがイッタラにこのデザインを提案した当時、ガラス製品は左右対称の円形を基本としていた。アルヴァはスケッチを出したのみで、制作は職人たちに委ねられたため、職人たちは大いに悩んだという。なんとか木型を作ったものの複雑なカーブに均一な厚さでガラスを吹き込むのは容易ではなかったが、ガラス表現の可能性が拡げられたのは明らかだった。《アアルト ベース》は1936年に制作が開始されると、翌37年には形や色の異なる作品を含む《アルヴァ・アアルト コレクション》として発表され、数十年のうちにモダン・ガラス・デザインを象徴する存在となっていった。

展覧会では内側が黒く焦げた木型や、吹きガラス職人が制作する様子を捉えた映像も展覧する。いろいろな角度から《アアルト ベース》の面白さに触れてほしい。

(廣田理紗　当館主任学芸員)

「没後150年　山本栞谷と津和野藩の絵師たち」
2023年7月8日（土）～8月28日（月）
休館日：毎週火曜日（8月15日は開館）　開館時間：9時30分～18時（展示室への入場は17時30分まで）

企画展

図1

図2

図1. 山本栞谷《王義之書扇図》
安政年間（1854−1859）初め
津和野町郷土館蔵

図2. 山本栞谷《鯉魚図》
安政年間（1854−1859）初め
浜田市教育委員会蔵

山本栞谷が描いた津和野藩邸内の杉戸絵

山本栞谷（1811−1873）は幕末から明治初めにかけて活躍した、津和野藩出身の絵師である。師は三河国田原藩（現在の愛知県田原市）の家老かつ絵師として有名な渡辺崋山（1793−1841）であり、栞谷は崋山の代表的な弟子10人（崋山十哲）の1人に数えられている。全国的な知名度は低いものの、江戸に住みつつ京阪や東海道を漫遊したと伝えられており、現在の栃木県、千葉県、静岡県、愛知県など、様々な地域に栞谷の作品が残されている。一方、栞谷は嘉永6年（1853）頃に津和野藩主・亀井茲監より津和野藩の絵師を命じられ、津和野藩の画事に従事していたことも知られている。

このたびの企画展では、2023年が山本栞谷の没後150年であることに合わせて、その初期から晩年までの幅広い画業を紹介する。本稿では、栞谷の代表作の一つといえる津和野藩邸内の杉戸絵について紹介したい。

津和野城の麓に位置していた津和野藩邸は、嘉永6年（1853）に城下の大火により焼失し、安政年間（1854−1859）初めに再建された（現在の津和野町後田にある津和野藩御殿跡）。焼失前の藩邸内には、桃山時代の絵師として名高い海北友松（1533−1615）による杉戸絵があったと伝えられているが、再建後の杉戸絵は主に山本栞谷と岡野洞山陳盖（狩野派の系譜を引く津和野藩御用絵師、?−1860）が描いた。再建後の藩邸内の間取りを記した絵図の写しも現存しており（栗本格斎《津和野藩邸内之図模写》1914年、津和野町郷土館蔵）、筆者と画題が明らかなものだけで少なくとも30面程の杉戸絵は栞谷筆、6面程は陳盖筆であることがわかる。さらに杉戸絵以外の衝立、屏風、額なども含めると、記載されている栞谷の作品は約60点にも上る。また、渡辺崋山の周辺の絵師による桜間青厓《鷺図》（袋戸）、椿椿山《鶯鳥図》（袋戸）、福田半香《山図》（袋戸）の名も記載されている。明治4年（1871）には藩邸は解体され、現在の浜田市へ移築されることとなり、杉戸絵も含めて部材は売り払われた。

現在、杉戸絵等のほとんどが所在不明であるが、いくつか現存が確認できているものもある。その内の1つは、山本栞谷《王義之書扇図》（図1、津和野町郷土館蔵）である。《津和野藩邸内之図模写》には「杉戸　王義之ノ絵画　山本琴谷筆」と記載があり、図1はこの記載に該当するものだと考えられる。渡辺崋山ゆずりの人物描法に濃彩を施した大作である。

他に、山本栞谷《鯉魚図》（図2、浜田市教育委員会蔵）がある。《津和野藩邸内之図模写》には「杉戸　鯉魚」と記載があり、図2はこの記載に該当するものと考えられる。作者についての情報はないものの、栞谷の作品に同図様の鯉魚図があるため、作者は栞谷と考えて良いと思われる。

上記2点以外にも、山本栞谷《鶴図・鷺図》（浜田市教育委員会蔵）など、藩邸内の杉戸絵であった可能性のある作品はいくつか確認されているが、より詳細な情報は企画展で紹介することとしたい。

（角野広海　当館学芸員）

報告

企画展「平川紀道・野村康生　既知の宇宙｜未知なる日常」
2022年7月2日～8月29日

石見から、地に足をつけて宇宙を思う

2022年夏、当館では初めて現代作家の新作で構成する企画展を開催した。平川紀道と野村康生は、いずれも石見地域出身で、国内外で精力的に活動している作家だ。

美術館からは「展覧会は3室で構成し、このうち1室では2人のコラボレーションを行い、何らかの形で地域の人が参加できるものにしてほしい」という要望をした。

その結果、2人が共同で考案した仕組みの中で、来場者が指示書に従って作業するインストラクションアート（鑑賞者への指示=インストラクションを中核とする作品）を発表することになった。開幕に先立つ5月には、同じ仕組みを用いて2人の母校・島根県立益田高等学校の美術部員と共に、企画展で大型スクリーンに投影する映像（図A）を制作した。

参加者に指示されたのは、1本の紐の両端を任意の2点に掛けるという単純な行為だが、周到に設定されたルールに従って紐が1本増えるごとに写真を撮り、それらを繋いだ動画を上下反転させるというシステムにより、何百もの山型の曲線が次々と立ち上がって建造物のように成長する映像が生まれた。

会場には、この実験的な作品に2人がそれぞれ付与したタイトル「ひもと重力による構造形成」（平川）／「力が生まれるところ」（野村）と共に、各自の趣旨文を掲げた。これを読んだ人は、紐を2点で吊ると下向きに曲線ができるという当たり前の現象には、重力が作用していることに改めて気づいたことだろう。私たちは日常生活で重力を意識することはないが、視点を宇宙に持っていけばその存在を認識できる。展覧会タイトル「既知の宇宙｜未知なる日常」に込めた意図が反映された作品になったと思う。

一方、残りの2室を使った平川と野村それぞれの作品については、特に条件を示さなかったのだが、2人とも地域に根差した作品を制作、発表した。

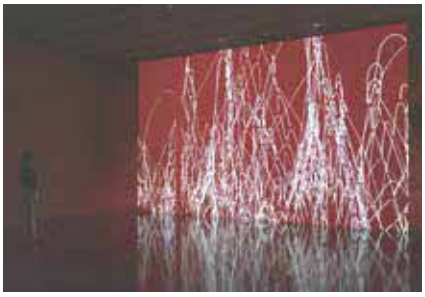
平川は、石見の自然を素材とした3つの作品を発表した。このうち《TRAPPIST-1》は、全天球カメラ（360度カメラ）で撮影した地元の風景で、このたびは4点が発表された。画面中央の十字は、地球から40光年の距離にある星、TRAPPIST-1の方角を示している。この星の周りには、人類が居住できる可能性がある惑星がいくつか存在するという。このうち（図B）は益田沖の無人島、高島で撮影したもので、人が住まなくなった島から、人が住めるかもしれない星を望むという設定が、見る者の想像力を刺激する。目標の星を包むように海と大地が円周に展開する構図は、私たちの身体を取り囲む地表と、心の内で遥かに思いを馳せる宇宙との関係を表しているようだ。

野村もまた、地球と宇宙をテーマとする作品を披露した。天井高7m、15m四方の展示室いっぱいに広がる巨大なドームは、《InsideOut》という題名のとおり地球の「裏返し」がテーマで、ドームの内側が地表を、内側で回転する三角錐（正五胞体）が宇宙を表す（図C）。作品の下にはソファを置き、寝転んで鑑賞できるようにした。立って見上げるのではなく、仰向けで眼前に広がる作品を眺めると浮遊感を味わうことができ、野村が提唱する、人は地上にいる限り重力がもたらす上下方向のバイアスに縛られている（宇宙に出ればそれから解放される）、という主張が腑に落ちる気がした。

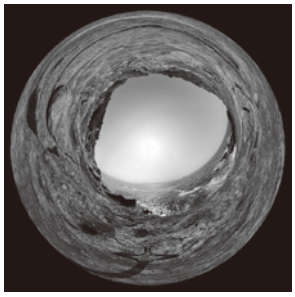
こうした主題や、三角形のシートを組み合わせた幾何学的な造形は地域性と無縁にみえるが、作品は野村が約1か月、益田市内の体育館に滞在し、地域の人々を巻き込んで作り上げたものだ。さらに展示室には彼が幼少期に親しんだ高津川で採取した音を流し、市内山間部に自生するクロモジにちなんだ香りを放出した。音や香りや横たわった感覚、さらに制作過程を垣間見た記憶など、形にならない要素は、来場者の記憶に2022年夏の益田での体験を強く印象づけたことだろう。

近年、アートと「地域」を結びつける動きが増えているが、多くは観光や地域活性化への「活用」を狙ったものだ。今回の展覧会もそれと無縁ではなかったが、2人の作家は地域に関わりながら宇宙をも視野に入れたビジョンを作品にすることで、アート本来の役割――ごく簡単にいえば、新しい視点や認知の方法を提示すること――を示してくれた。これを糧に、当館でも地に足のついた活動を継続していきたい。

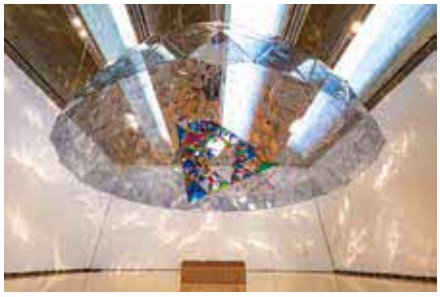
（川西由里　当館専門学芸員）



A. 平川紀道《ひもと重力による構造形成》／野村康生《力が生まれるところ》展示風景



B. 平川紀道《TRAPPIST-1 no.1》 2022年（本展ではno.1～4の4点が展示された）



C. 野村康生《InsideOut》展示風景

島根県立石見美術館ニュースレター
2023年2月20日 発行
〒698-0022 益田市有明町5-15
TEL: 0856-31-1860 www.grandtoit.jp